



重

日本書紀

Nihon Shoki Vol. III

冬



唐李嶠詠物詩

日月風雲土地文寶金銀珠玉ヨリスベテ
器賤木竹草花生類ニ至テ詠物ノ詩 全

唐詩白圭

唐詩選訓解等拾遺 李于鱗 全

東郊文集

詩文尺牘 全五冊
徂徠先生閣○則序跋徂徠草書

灞山詩集

南郭先生閣 長門瀧弥ハノ詩 全

蘆隱稿

南郭先生閣 詩文尺牘 全

唐翁詩集

伊藤長胤閣 全二冊
唐五言七言對聯ヲ集ム 全二冊

唐詩聯選

文章雋語

桐江先生著○五經及左傳之語ヲ悉ク抜萃ノ
スベテ國字分ニシ出所ヲアラハス

日本歲時記卷之六

冬

得書律曆志ノ冬ノ終ニシテ
雅小冬ノと云々○和語ノ冬ノと云々
此ノ冬ノと云々○和語ノ冬ノと云々
此ノ冬ノと云々○和語ノ冬ノと云々

素問ノ冬ノ三月これノ閉
陽氣ノ事ニシテ
陰ノ事ニシテ
陽ノ事ニシテ
陰ノ事ニシテ
陽ノ事ニシテ
陰ノ事ニシテ
陽ノ事ニシテ
陰ノ事ニシテ

とありはまはひつものか

千金方に云く冬は天候は氣閉血氣伏病あり人
を又勞心あり汗とわ湯堂と熱湯を飲す

月令廣義に云く冬は万火を衣服とありは
事只か暖を衣ししめてしむ大に熱されぬ事
臥疾瘡瘍熱病と云ふ

本草に薑書に云く冬は火を衣しは暖あり
厚衣ふ久しそやめされ血を擦す

金匱要略に云く冬は衣足と伸しめせぬ身暖あり
又雪及七載に云く冬の衣被と云く却し大に

暖なりは睡危多の附目と入り氣と吐くは積毒
とかせも病あり冷抽鉄石を枕するはさ
人をして眼勝しむ

月令廣義に云く冬月は天を門と出の附を必蓋酒
と飲く多和と合せく一或は薑を煮て飲む又
可なり元陽といひ物志に云く冬月の動毒
多し晨元服してこれと和すかこれむ
王肅張衡馬均と云ふの三人籍と和して晨
に多飲一人を飲一人を病一人を毒す其
友と和ぬるは死すものか元後あり病せはた

已^見今^見食^見一^見一^見一^見のなる恙^見存^見たもの^見の^見海^見との^見
 り^見れ^見あり^見一^見一^見一^見又^見使^見民^見其^見纂^見の^見大^見小^見を^見さ^見る^見を^見記^見
 する^見一^見と^見出^見る^見一^見と^見油^見と^見中^見に^見食^見は^見能^見く^見事^見に^見耐^見え^見
 ず^見及^見七^見載^見よ^見と^見く^見大^見雪^見れ^見中^見改^見足^見あ^見る^見歩^見び^見一^見改^見て^見何^見
 熱^見湯^見と^見い^見く^見浸^見洗^見よ^見を^見な^見れ
よ^見熱^見湯^見あ^見る^見一^見と^見い^見く^見或^見大^見よ^見あ
 たり^見八^見指^見さ^見れ^見あ^見る^見一^見と^見い^見く^見は^見じ
 又^見を^見氣^見は^見り^見て^見海^見る^見一^見と^見い^見く^見は^見ま^見熱^見
 湯^見熱^見食^見と^見食^見の^見決^見志^見を^見く^見一^見と^見い^見く^見食^見飲^見と^見く^見一^見
 金^見匱^見乏^見暇^見に^見い^見と^見く^見冬^見れ^見乃^見括^見羊^見法^見食^見飲^見八^見腎^見と^見食^見食^見す
其^見中^見の^見書^見書^見ふ^見い^見と^見く^見冬^見三^見月^見碱^見味^見れ^見食^見物^見と^見く^見よ^見苦^見味^見れ
 食^見物^見と^見増^見一^見と^見い^見く^見心^見氣^見と^見事^見一^見と^見い^見く

本草に^見い^見く^見冬^見れ^見乃^見多^見く^見葱^見と^見く^見一^見人^見を^見一^見と^見い^見く^見病^見体^見
 致^見せ^見と^見也^見
 月^見令^見度^見義^見よ^見と^見く^見冬^見黍^見と^見食^見一^見熱^見性^見れ^見物^見を^見ま^見る^見一^見寒^見
 事^見と^見い^見く^見な^見ひ^見一^見極^見み^見曰^見古^見若^見功^見作^見之^見事^見時^見於^見
 冬^見の^見果^見乃^見修^見一^見と^見い^見く^見士^見庶^見人^見と^見い^見く^見海^見あり^見時^見な^見ま^見る^見功^見化^見れ^見
 事^見と^見い^見く^見な^見ひ^見一^見極^見み^見曰^見古^見若^見功^見作^見之^見事^見時^見於^見
 冬^見月^見用^見湯^見之^見浸^見也^見修^見完^見玉^見盧^見墻^見垣^見之^見敷^見時^見乃^見其^見案^見計^見
 時^見見^見一^見歳^見之^見事^見洗^見終^見勿^見復^見慮^見甚^見始^見也^見呂^見氏^見曰^見洗^見成^見今^見案^見之^見
 終^見又^見慮^見其^見案^見之^見始^見有^見謂^見之^見朔^見易^見始^見而^見終^見而^見始^見此^見天^見地^見生^見
 不^見窮^見之^見道^見而^見聖^見人^見體^見之^見以^見贊^見化^見育^見良^見如^見終^見乃^見物^見之^見意^見也^見又

朔日、いりりとして今日煖爐會として民が并はるる
酒のこぼれと食ひたのむ事、まとうや冬に初なる
あつて、いりりとして今日煖爐會として民が并はるる
いりりとして今日煖爐會として民が并はるる

皇朝明宗時雜記曰、家人十月朔、沃酒乃炙醬肉於
爐中、圍坐飲、喧譁之煖爐、之義、雜記曰、十月朔、有司
進煖爐、炭、民間仿置、酒作煖爐會

○古訓、いりりとして今日考妣先祖乃墓而泣、
父母先祖の墓と泣く、いりりとして今日考妣先祖乃墓而泣、
父母先祖の墓と泣く、いりりとして今日考妣先祖乃墓而泣、

二洋なり、いりりとして今日考妣先祖乃墓而泣、
合掌を天竺に託する、いりりとして今日考妣先祖乃墓而泣、
おむと、いりりとして今日考妣先祖乃墓而泣、
なまて、いりりとして今日考妣先祖乃墓而泣、

十月一日、墓を夢見、雜記曰、十月朔、都塚、士庶皆於
餐墳、禁車馬、朝、食節、○南粵志、十月一日
國中、風俗皆化、糶糶、或化、系、他、以、祀、先、祖、蓋、告、冬、之、義

初代春日館と称して合事あり地ありやけり也上代末
 乃日内為寮より此言精とまほあさりれ并して
 こころの山言精を天子餅乃名あり あさりの根は節
 竹地要略なり
 又天子乃徳七種の粉と合く他七種は粉と
 大豆小豆大角豆胡麻粟榎糖ありと常中層より先
 たり此歌事ととりうけくは日民取よりたまて徳と
 審してくぬい事なり乃此よりたまりたりと也たの
 徳森武よのせられは徳よりありとてとよりぬ安
 元年汝法ありと大印記取を師当るも勅文とまひ
 いらぬも本朝の地なりとたたりたりとて

本記とのまよりあはれ、龍林は事物終りの徳の八箇
 よりけりやくれありらぬとてより一より國史
 たり時代并他のすくもとのぬらぬとあり一より二
 とせれ七月乃此事なりとて子夜のとりあはれ
 十月のされ月よりして是より用はるなりとて一年の
 月れ教うとてゆすなり十三とてあはれとてはる
 まはるしとて物なれはとて此事をこころの
 たりありしにやをむしとてありつとてなりとて
 一とてありとてありとて是他天皇の沖よりとて是れ日の徳
 もよりしとて日春紀とてありとては又攝略はるなり

ひ月紅梅と取て皮ごと削成事につくぬころ入替ふ果を
むきして日を晒し皮とごつて皮をよむる葉を包て
簀^ひ草^くひ又梨とと收^あま^ふ一梨子と收^あま^ふは梨子と
穀^こ顆^こ茶^ちと心く梨子一顆^いく^くと心く何^なて^てり
酒^さち^ちる^るお^おま^まま^まの^の塩^しを^をよ^よあ^あか^から^らひ^ひ
月^づ今^い度^ど穀^こノ^ノ尺^せを^をり^り又^又採^とり^り大^お袋^ぶと^とあ^あら^らひ^ひ
薑^かと^と元^げの^の葉^はに^に挿^さし^し紙^しを^を包^くて^て採^とり^りあ^あら^らひ^ひ
を^を蒸^たげ^げる^る中^ちの^の採^とり^りと^とあ^あら^らひ^ひを^を採^とり^り
又^又ひ^ひく^くす^す一^一と^と長^ちの^の尺^せを^をり^り又^又梨^り子^こ
と^と漬^しめ^めぬ^れハ^ハ一^一と^と採^とり^り又^又相^あ影^いお^お成^じ志^し

梨子と收^あま^ふる^る葉^はと^と心^こく^くて^て梨^り子^この^の付^く合^あさ^さら^らや
ら^らに^にと^とれ^れハ^ハ年^{ねん}と^と経^へく^く採^とり^りの^の尺^せを^をり^り

ひ月乃末^ひ葉^は葡萄^ぶの中^ち実^み一^一た^たら^らと^と蒸^たげ^げす^す一^一十一月
よ^より^りハ^ハ中^{ちゆう}虚^{きょ}して^{して}何^なて^て

○蘿蔔^ら醃^ん乃^の法^{ほう} 蘿蔔^ら 十^{じゅう}斤^{じん} 細^{さい}粒^{りゅう} 一^{いち}石^{しやく} 麴^{こく} 三^{さん}斗^と 塩^{しん} 二^に斗^と

先^さ方^{ほう}根^{こん}と^と切^きり^り日^{にっ}日^{にっ}と^と切^きり^り後^ご細^{さい}粒^{りゅう}と^と塩^{しん}麴^{こく}と^と何^なて^て

合^あせ^せ挿^さし^しる^る葉^はと^と心^こく^くて^て採^とり^りの^の尺^せを^をり^り又^又粒^{りゅう}塩^{しん}麴^{こく}

と^と切^きり^りの^の何^なて^ても^もめ^めじ^じす^す一^一は^はは^は久^くし^しく^く塩^{しん}を^を

○又^又法^{ほう} 大^{だい}方^{ほう}の^の葉^は葡萄^ぶ中^{ちゆう}の^の塩^{しん}を^をり^り入^いれ^れて^て何^なて^て

た^たれ^れる^る時^{とき}用^{よう}の^の気^きを^をり^り塩^{しん}を^をり^り入^いれ^れて^て何^なて^て又^又ぬ^ぬる^るか^から^ら

たくとへへうら

○又法 苧蒿とよく洗ひこりやち毎夜席と押ひ
 染小少あつとちく後まつとわらし水雪をたけ濁し漬
 苧蒿一つんかへ塩と苧蒿かこゆわくようしとま
 鹽とちりめは洗ひに漬やとりけまへ〜又ちれく
 けま〜後〜乃乃糟と米糍垢とつとませたの大根と
 あい〜洗ひ乾ち時漬るた〜

此月又竈を修繕す〜
 げ月梅子の枯葉せりつと取ら〜晒〜葉〜又あ
 漆をすす但葉のいかにわつと用ゆあ〜山梅と云

又月今度兼よ〜十月は梅子の熟すとあ〜い物
 乾〜身甚三月は熟くうぬあ〜して灰土をく
 むい葉とちゆ〜〜次代年梅〜裁ま〜定
 け〜て〜と結ぶ〜〜又月よ〜本は〜
 元節晝後よ〜十月葉落のよ〜枝と一尺ちり
 又さり日所〜よ〜枝とちり〜
 至正月よ〜ちりて根ます〜と水邊林下〜の地
 け〜も〜ちり〜の海〜
 花〜ちり〜て〜
 あ〜ちり〜た〜

は月の中より楓樹を以て紅葉多しと代蓋りて時を
年のより重よりて是れ氣候と云ふれん
十一月上旬より雪を以てあり元紅葉を以て
花を以て下けりてふりて時を以て紅葉
一葉田を紅葉の名と云ふ一重を以て今冬
有し初雪を以て尾の紅葉を以て雪を以て冬
至を以て冬と云ふ是月暖帽と裁く事なれ服
冠やせハ眩暈の疾あり

げ月半と云ふは大雪の積りて食をなれ極と
くくハ血脈をやめ進と云ふハ涕唾多し霜
うくれハ熱葉と云ふハ雨れ多と失りては猪肉と
くくハ雪と云ふハ月令庶養より云ふ又
蕪と食するはれ鯨肉と食ハ病疾と為す也
来古の書云ふと云ふ

十月乃古候より一氷始氷牙二地始凍牙三雜入大水
為屋太と云ふは三候なり牙四虹飛不見牙五天
氣上騰牙六地室中閉塞牙七大雪牙八雪之
立冬益田中三刻中十分中十分中十分中十分中
酒及射 月令庶養



和歌山



和歌山

六

十一月

首と末と云中と冬と云の十月代末の仲冬奉月
後彫律と蒼澤と云の十一月の和氣と奉月と云
事と云るに云の事奉月
と云と異せらる

朔日周の代まの月を云、兼者といはれ、今日を
かつら周の代まの月元日あり天を云、并つら義
と云わると云、

冬を十一月乃中あり二と云て一は法極の二二の
陽氣始く此に冬日の南より出づは云、冬より一
冬を代ま一日は契りて法極也と云る、二の事、日の
冬より一は契りて又、冬を云、二の事、日の
冬より一は契りて今日一陽を代まして後陽氣日

に長一日も短くや、長くなる湯、寒れ始く生はつたれ
と、労働まう、次安好に、て微湯と、兼者、一、閉戸、恐
驚いてる事、に、何と、人、の、お、り、ま、う、の、又、奴、僕、と、事、
辨せしむる事、なれ

易曰、雷在地中復、先王以、此、日、閉、閣、高、旅、不、行、后、不、者
免、免、虎、通、曰、此、日、陽、氣、微、弱、王、者、承、天、理、物、在、率、天、下
靜、不、復、以、役、役、助、微、氣、來、宗、地、也、伊、川、易、傳、曰、湯、始
生、甚、微、在、勢、而、後、長、在、復、之、象、同、先、王、以、至、日、閉、閣、未、子
曰、一、湯、初、復、陽、氣、甚、微、不、可、勞、動、
○今日、復、と、契、一、事、人、奴、僕、も、事、を、以、之、湯、復、と、契、り

一又先祖考妣乃孟采少也献一采酒とる又新
果とまをむ一

○冬を乃日鑽通改火ハ瘟疫とあはれ鑽通書礼儀
志ス刃ス一符と鑽通ハ本とむとて火ととる
松子実り冬を乃日

天時人事日相佐冬を湯生喜又木刺透血級流弱
縮吹散亡策効飛灰岸君位臘将針柳天寒御之
秋放梅雪お不殊郷國之夫教也且霞堂中杯

○冬を乃日十日房事と長く一とまを海よりえり
は比ハ人カハ氣とぬくひろ光かてくくらては

以て才を美後生代根奉とす一素問の云冬不蔵精
妻必瘵瘦す又冬を乃あ後各十日婦人少く

十五日 孟子の卒也一日あり
崖壁考云孟予周報王二十六年
月十五日卒即今十月十五日

晦日 沐浴

予の國乃農民は月ハ初れ丑の日四報とあるとして俗念
とる又その服とよりちく男女あつまつて飲宴一人
とる事あり乞の比より多くする人少く
賤乃男儀の如きたる四報の如くはしる何れは
とあるといふ事とあはれ御す未糖とつて
如く耕代とあはれ御す

西九回社を社農氏といふあるべしこれハ社農ハ人カ牛
 首カウハ五九日にあるまや西と牛とお通志と用り家
 たるハ月よはあともるまの農事終る所をれハ此
 毘法と社と記さるべし杜氏通典ハ伊耆ノ代始有農社也
 社農氏ハ農初也畢ハ心社之れと云々
 乃ハ公田社とあるを古れ通しと云々げよ社農と部賦
 乃あまたやとくあり作らとらる物あり事ハこれと
 事と進カウとるれ始と忘れらる民の使あつたは道ま
 事をれハ天子乃礼を備へて日月の祭とあり至聖の
 乃言よまよひて此礼乃祭とを備へはす進ハるれ
 之を社農満ちるべし社農ハ國カまよく使ハ

此のそのまを社と云は他國よりくあるまやまを
 らんりろくハまも十月ハ回社とある事ありや
 されハ事始礼系よとく十月農功畢里社考カウ至聖
 食ハ社回社因ハ飲樂也終ハ社始子周人之禮云
 これと云くハ此ハハ國ハ風俗ハお似る事なり
 月余ハ月月初ハ少きまを社と云くハまもカウ至聖
 何先カカと云くハ橋の事と云ハ六カつて移く切地ハ
 有けす為ハまを入るハてハまむるカウ社農地也と
 あり竹やハ棚と云ハおまらるまよ下ますたる棚の

上は能く松葉とまきして上は橘と付合さるるに
照くは桐と加えてたれくまき上は瓜を丸め
ひたして二枚の付あくと能くかきし
福きりとよくとひききとれ六月の比まで持
よく熟し一は付これくかきし
うら付重し一二月までいたれの酸味何れ
みどく味し一は桐の下下乃万をこれの上は桐下
一は桐の付合くまきし又生かすと汁は
とまきしてまきやめり柑抽合橘と收り
蜜橘より物久しく持せぬ元橘類と收り

とありし又米よまきし一は又物類を蔵するに全
橘と收りしは葉を汁中よ入る久しして持せぬ柑を
收りしはやま物よ入れしは湯液とひく
又抽餅子合橘一は葉を製し貯し

○抽餅子代製法 抽のむを汁方とまきし
ことと去 ひろく口とあれかあり 少くも産物よく使ひ
好まむと能くしりて能くしりて合世胡椒胡椒
櫃のあくとくまきしよまき合世或は米乃平飯と細
まきしてまきし一は事類二か一なり
てたより 或事類二か一なり ちれしと抽代肉八分程

入薑葱みくむし能熟しし方取か一日より能く
か志丹より方時よく能くしとくけり日かき重ぬし
能く日又切て三日より入法し風吹ぬよ
ほりて重し一凡抽し一凡抽此能とかへく作す
久く能くもたせしとくし

○金橘しし法 金橘の大なるを取油よしけり
ていうさよあけし百や日か切て重し入口よし
能く風ひりきりやうふ重し

○大柑大柑の法 大柑をとりて油をいれしとくし
きり皮をももこ油をいれしとくし

○挖しし法 挖しをとりて油をいれしとくし
しめりよかりて好し

は月月を多くとりてとくし用し備し
一二寸のちしてとくし切て苞よ入屋中し能く
去苞よ不入しとくし油をいれしとくし
とくしとくしとくしとくしとくしとくしとくし
と切へく油をいれしとくしとくしとくしとくし
又は月月を多くとりて好しとくしとくし
ぬきとくしとくしとくしとくしとくしとくし
ののきりつりしとくしとくしとくしとくし

芥菜カイサイ 芥菜之月采種甚青
仲冬之月采種甚青
葵カイ 葵之月采種甚青
月令ツキノトキ 月令之月采種甚青
必掩ヒツケン 必掩之月采種甚青
滋湯シトウ 滋湯之月采種甚青

月令廣義ツキノトキノヒロキ 冬之月采種甚青
益天地乃氣閉塞セキテンチノキヘイサイ 益天地乃氣閉塞
竹タケ 竹之月采種甚青

月令龜籠ツキノトキノカメカゴ 月令龜籠
食クハ 食之月采種甚青
竹タケ 竹之月采種甚青
芥菜カイサイ 芥菜之月采種甚青
必掩ヒツケン 必掩之月采種甚青
滋湯シトウ 滋湯之月采種甚青

十一月の六候第一鵙見不鳴牙二虎如交中三嘉
擬出右大智れ三候より牙四坂引結中五麿
角解牙六氷象勃七冬正の三候なり

冬正三十七刻二千分夜ち千二刻二千分大智こ
昔狩互射 月令廣義

日牟采時記卷之六

日牟采時記卷之七

十二月

前と小定と云中と大定と云の十二月の英名 孝老 陰月
歳月 徳と大智と云〇十二月乃知ると云るひくつ保と
ひく保名と想ふひあるひ鐘とよませ事あるとせりし内ある所とせ
といふと終るなり一奥儀抄に云るなりとすと云と毎々たりし後月を
月とれは志とつとつと云るなりとすと云と毎々たりし後月を
そは乃圖は極のなりといふととつとつと世に云は月と極を云る
いふとつとつと極と極なり
附舎れはなり

朝日殷乃代ふを建丑九月と歳暮とせりし今日正
殷の正月元日あり四候これ日と乙子朔日と云ふ乙子
乃りらして極と祭一終上事なりあつたなり
すりし事と云ふれ一年の万事をく観らと云く
かきし事なりしなりと終るなり

八日ありて一とて臘八と云今日電と云く自洋と云す
一一年時記に十二月八日経に臘八に電神と云り
云く又電と云つるを云く一乃風俗なり

按て向に風俗也一類項氏子なり黎と云ふは
祝歌なり記して云く電神と云す一乃云く一乃
一乃云く一祝歌と電神と云ふあり又意事也
其は彦神無津姫神は二神也今乃人れ云く電
神ありとありてこれと云く我國の電神也

○今日水と云く壺と云く入野と云く一救人なり
臘八に氷来平治一切疾病製飲食臘八日水

丸律たりとあり

十五日釈迦佛涅槃日あり破邪論に周穆王五十二年二月十日佛涅槃すとあり周代は六十月と云
案考すとすあるは二月八日今此十二月ありあるは今世二月
十五日と云く佛滅日とす俗にあり

○上旬中旬乃中臘月乃節と云く冬と春
際て云く正月乃用と云く一乃云く一乃冬春
冬と臘日に米と春と貯と云く

范正能回坐府序曰余居石湖後來四志得樂
十更探其德者賦一待以賦風土其一冬春臘日

春米为一袋計多聚并白臘中畢事出子事 瓦倉中經年不壞名冬春米又動聚

○十五日此後屋中乃煤塵と掃へ一煤塵と掃に
世人多く釣白と乞て恒例恒例とす然れども或風多し後河
多六釣日に物物とす十五日乃後風多し乃後日と用へ

関書関書と澤志澤志を引て臘月廿四日毎家掃塵也
和色ハ中毎中毎のともさうと乞又釣白釣白と物物とす

二十日北の屋の多と書れ 因信は月中旬より清乞人清乞人と縁縁納納

みく西とちりい又縁納縁納とす膝膝と膝膝い鳥帽鳥帽と忌
まきとろといひてとろくの縁納縁納とすといひ并り

くろりありとにほろんといふまゝといふまゝと
都鄙都鄙たよとあ事あり

○下旬此内親戚親戚と道物道物一と菜書菜書と契契す又まわ
下此親親実実方方預預指指の美美宿宿因因若若代代者者も親親力力に注注て財

物物と贈贈へ一或親或親の常常と思思酒酒所所く師師傳傳とあさ
人親身親身及及友人友人乃病乃病と瘡瘡せし醫醫師師をよとさす

注注くあつと物物とさす一疎疎薄薄なりくはさるるや其
を給給くせんせんの給給くせんせんとさす一決決一かきかきの給給
はく一都都吾吾なりくは元都吾元都吾かれは徳義徳義行行かれ
す人偏人偏とあつと一因因病病とあつと事事もさす財財と

とてそりたたくて之りてあはれとてひたすら
そのありさまをけねとてくまなくとて

風土記曰。兵蜀國。後威。晚相。其。愧。榮。又。極。子。賤。

愧。榮。待。回。大。功。名。已。收。榮。華。の。未。休。為。歎。悲。母。具。

假。拍。不。滿。後。山。川。流。石。崖。多。高。林。小。大。宮。聖。巨。程。操。

殺。魏。雙。免。臥。家。人。事。事。廉。珠。浦。光。翻。坐。若。若。愧。不。

能。微。勢。出。春。磨。官。居。故。人。少。里。巷。佳。節。過。如。欲。舉。以。

風。猶。唱。年。人。和。これとてくまなくとて

物と親戚に盡くし送るころまてとて

○又下旬の内年三三とて父母兄弟親戚と客する事

ありこれ一とせ乃月事なくあまの事と終言さる

孫子賤。別業待回友人適平。皇懷。別尚。遲。人。行。於。

可。復。業。仍。那。可。追。向。采。安。所。之。志。在。天。一。涯。已。過。

東。侍。水。赴。海。降。等。時。東。都。初。勢。和。舍。三。城。七。肥。止。為。

一。日。款。慰。此。存。年。悲。勿。嗟。悲。業。別。終。与。新。業。辭。本。

去。勿。回。然。還。无。老。与。妻。あまの事と終言さる

又。抑。那。代。辭。編。よ。と。く。誰。人。衆。書。古。人。宴。集。

曰。激。數。以。等。代。終。と。考。乃。れ。ハ。も。ら。う。と。て。水。志。

とて

乃。始。り。あり



梅子園日記



梅子園日記

○正月下の午乃日ぬく〜と〜と臍をぬけよ
鬚と一毛をちりきひ一年乃百箇よりぬき洗
髪にぬく〜と焼その灰と煮よ〜とよ〜と

一十七日 比徳と煮す〜一日より煮よ〜と煮
よの〜と煮よ乃命の肉より別に煮を他りぬる年此
に用ひの〜と煮す〜と脱水と煮を煮す此ハ味
美にして久〜と煮〜と性利方ありぬる菜初よ
利りハ日殺多く歴〜と煮破方ありぬる煮す〜と
次但大煮肉よ煮〜と煮よの煮〜と煮す
ハ毒にやり〜とあり元徳と煮す〜とよ〜と元徳

わら煮よ米と〜と又ハ米と煮〜と酒氣
阿波ハ泥〜とた〜と初〜と酒よ〜と
竹た〜と用ひ〜と〜と酒氣を〜と
〜と用れハ徳ゆ〜と煮〜と煮れハ方〜と用
にた〜と用〜と〜と酒よ〜と煮〜と用
磯酒の〜と煮米と煮〜と煮書ハ〜と
〜と〜と〜と〜と〜とハ〜と
い〜と〜と〜と〜と〜と

- 二十日 屠種と合ひ〜
- 醫林集要屠種方 大黃 山椒 桔梗 肉桂 防風

各五方 川烏頭 白朮 菝葜 各一五 右八味對之律囊以

多入 除白以井中二掛座以沈め元且又取布一

囊方又湯又浸一の煎一と取又向くこれを取後

に囊を井中一と取川乞と服す此の尚年瘧疫と

石瘧 菝葜の少取末の事有り日各一と取れ 赤朮 桂心 各七方

○又方 本草綱目一のく、除地之小赤方云菝葜が也 赤朮 桂心 各七方

防風 一兩 菝葜 一五方 蜀椒 桔枝 各五方 烏頭 二五五分

赤小豆 十四枚 三角乃律囊よこれと乃そか右り

招解 赤小豆ハ蒸ホキあり根とハ肉桂の皮あつく

○又方 出干日 全廣義 大黃 一各 桔枝 去蘆 川椒 去皮各 一五五分 白朮

獨心 各五 烏頭 炮去皮膚 吳茱萸 一各 防風 去葉 一兩

○本朝屠務方 白朮 桔枝 山椒 防風 各一五 肉桂 五方

大黃 二分半

○白散方 白朮 桔枝 細辛 各一五

○渡嶂散方 麻黄 一各 山椒 細辛 防風 桔枝 藜蘆 各一五

白朮 肉桂 各五分 已上三方典藥頭魚安信濃方也

○以日志の繩と依り除日代用之はく 表法之具 修下ノ詳あり

晦日 又海日 沐浴 晝食倍多 より 晝際 と用ゆ

晝食此後士より取ふよりそく兼善と云一國老云

長親戚乃取より修く 此 庶人ハ不自親戚ノ家

清て受す一

○屋中及宅中と考く掃深し一掃とたて戸より

洄運繩とせし一 此条初後より明ら此より一掃行ふ事あり
乃ち此より久しゆの至るまで掃とせし

中へ云はれぬ事
あり

○今初と除穢と云ふ又除穢と云ふ一年の初り也

其の法と云ふと云ふと云ふに 袷服と忌酒食と生祀

乃 盡前より後へ云ふに 忌酒食と食し也少人奴奴

何之と云ふと云ふと云ふに ぬるると云ふは 歌舞

甲しと云ふと云ふと云ふに 掃と云ふに 新を造る

圓形に風土記より云く 掃衣を甚先祀也 幼穢飲祀

願ふ教得之分業けり一年の終るおるれいやく

あくと事あり又掃と云ふに 今初は人の分業と

あむままつつと云ふと云ふに 掃と云ふに 掃と云ふに

と云ふは 掃と云ふに 掃と云ふに 掃と云ふに

○今初は床臥上及寝不寤と云ふと云ふに 掃と云ふに

溼宜節氣助陽法又外を焼と焼一 是より云

所を焼と焼一 掃と云ふに 掃と云ふに 掃と云ふに

乃ち湯敷と焼一 又と云ふに 掃と云ふに 掃と云ふに

あくと下人と云ふに 掃と云ふに 掃と云ふに 掃と云ふに

事なりと云ふに 掃と云ふに 掃と云ふに 掃と云ふに

元徳一丁一丁一月令度義の刃をとり

○今年中一歳は用何すと西代業と今夕中夜は
焚ハ疫氣と遊し四時暴暴に人々入り又今夕暮
本と多く焚ハ疫氣と遊し生生種よとえぬり

○俗より云く今宵藤豆と云う下藤豆と云うは藤豆
の根の人の信

○藤中乃退散色一二月毎のしあき刃えたり又ありき
金吾常持進備殿と向きの今宵それ事と云ふ下

と相豆と云うして西鬼とあせざる中世後同答り
あふひは西鬼乃相約もろなる焚中まきびりハ
陰陽寮と云ふもとよとて上り下り事と云ふ同日
ありとて焚えたり一まきの西と云ふくゆよまて

ふことゆつと内素れはつとまもるなり又取

上人を中殿のうまよまて地乃弓葦乃矢あり

とてまきまてとてまきまて鬼とて

らあまりたりとまねるなりとてなり

又如事多事と云ふ下は因疫疫死終日本紀の
始他事大條すくゆりこれそのくゆるなり又執事の

奥傍の香津事流過の多よ事又れなり

皇海におまて二匹乃鬼おと都よりくま

汝乃はむちりなりとくもされ列あり多乃

事ハ養一これハはあはゆきとてく四十九家

乃物ととりて事なり穴と封一云名三斗れま

りく鬼代目とくらしす埃囊物と志れ
 俗も石神の舞伎まの如く石神代乃役と
 したも此と何も人色いれされたぬされ
 備を度とおもててありたしな敷乃やうかなき
 月終礼祀備終あものせりそれより後世に
 終後志と志るさびしきゆめたせ又選乃張
 衛り東家賦たふの伴なり又は東赤丸の敷とす
 りくさすくさ後深書のほり力えりぬ敷乃
 中の互のまは今四倍の量なりたす風
 やおんやひと八鬼と習いし方教ありた氏物終よあやしと俗も
備とややひと八鬼と習いし方教ありた氏物終よあやしと俗も

ましり馬ぬ人いままこたふ角ありて佛書たの袂のく
 そろりた形を物ありしきありきあわぬゆれしは流れま
 と御り御神の靈とさしてあり流邪の氣を感ずる人
 をとくまの物たしとされといふありと二海流湯ハ二がうか
 りとさゆりしと敷のりつらととん湯をぬく流を邪なり流を
 善なり流を悪なりいふあり湯とたつし流とやたは流なり
 又困信たとくらの鬼をくし編をくらしとくま
 たり捕とゆま古人乃流を流されまて流ま
 晴中た作を於地擲打る信方鬼眼精とゆこれ
 大皇と投たく鬼れ眼とくらしとくまあり物た
 家事と志りしつこまありぬの鬼と
 鬼とくまを古たらしとくまありぬの鬼と
 ○今おつものから大戦と折たとびる一岡鼻と云

鬼乃人とくらんとと居とあせく樹をくろく一族
囊抄に足えわれこれ又あせの夜るまは作風
とらにすすくまは日記よあすくはか
われの上りの法をくろくあせくは
くろくの書は枕笥畫箱畫牒帳戸をくはくこれ
の鬼とあせくまはのくろくはわれの勢あすく
○屠猪と今日より井の中に居るまは
海芳齋の海報乃のるま

一松葉酒を留砂坐看新年上盤詰
明日を我辭お射不知る

又冬道くゆる

旅飯を飛羽を眠空ん何事特凍死有郷今昔
思千里秋葉明報又一年

又方秋雁ウ

又与梅氣把一松
四年事留の要吾一併周

又王纏ウ

今案と智也明年の日供
又其氣色穴中改常執性哀倍風充人不足已
王後園梅

古今集の喜道列樹

こたせしものこときしつひの海をたふさるるを
徳信をまふふる系系後

とくまをたしめりぬくことよむるの年こそ
玉皇をまふる系系後

色あせしものこときしつひの海をたふさるるを
垣川百とよの四代

何事と結とをたしつひの海をたふさるるを
又那事

つねとよむるものこときしつひの海をたふさるるを

○は夜獲り形と圖と枕と堀と
て今の世伝よとあるもの事
新しうあるこれと用りしもの

梅とよむる獲る爾雅と云り洪洞及竹と云り
新代は尾形より獲る屏の楚代序と云り象鼻
犀目半尾虎足之獲る皮と海圖其形海郭今
海図之海澤又海細りしもの皮を生獲る海郭
腹外之動これ乃伝と云り刀を獲る海郭
西の物を得る事と云り海ありしものと
合ししもの事と云り海ありしものと

書ふ大儀乃時依^くあ^らむ^に邪^{まが}念^{まが}家^{まが}と^まり^ゆり
のあはれを され^をを^を獲^とれ^る事^を一^はは^らぬ^る後^の賤^し中^の乃
まをせり 則^す然^るに^て形^の何^れの^もの^し何^れぬ^れと^念ふ^に此^の也
こころ 乃^は事^を何^れの^もの^し何^れぬ^れと^念ふ^に此^の也
と 夢^を也^の一^はは^らぬ^る後^の賤^し中^の乃
く ぬ^る事^を何^れの^もの^し何^れぬ^れと^念ふ^に此^の也
乃 事^を何^れの^もの^し何^れぬ^れと^念ふ^に此^の也
突 突^とと^まぬ^る事^を何^れの^もの^し何^れぬ^れと^念ふ^に此^の也
お お^やし^ゆり^古人^乃言^ふ癡^{人の}面^をあ^らむ^に後^に
つ つ^とと^まぬ^る事^を何^れの^もの^し何^れぬ^れと^念ふ^に此^の也

乃^は後^に癡^{人の}面^をあ^らむ^に後^に突^とと^まぬ^る事^を何^れの^もの^し何^れぬ^れと^念ふ^に此^の也

○又^と夜^に和^むと^書き^て禱^り乃^はま^はり^てあ^らむ^に此^の也
之^は代^に送^る文^をあ^らむ^に此^の也
に^は返^すた^らぬ^に世^の信^をの^{通^はす}を^{止^まら}ぬ^に此^の也
あ^らむ^に此^の也
乃^はま^はり^てあ^らむ^に此^の也
女^子乃^はた^らぬ^にあ^らむ^に此^の也
○世^の信^をの^{通^はす}を^{止^まら}ぬ^に此^の也
い^ふを^{止^まら}ぬ^に此^の也
ま^はり^てあ^らむ^に此^の也

改嫁少婦多一鄰みもさる亦多一

これと小婦人女子のたかききりて丈夫のす
一事うたへくも凡世信ふ危きそ男女とのく年
數よりく凶災ありしはくおろき行へしむ
年ありげ年あり方人ありは神ありは
もえて了れ災とまぬき人事としむ俗巫乃
ともぐくこれと幸として民乃社をつむるを
事くしゆられといひ事一か舞乃書り忍び
日幸の四紀もをちるくむいむくもこれ海法が
ア一しや世内終よ大正元年母なる舞事と

大正元年といふ七歳より九歳と加え七十一歳より
まくとより七歳十歳二十歳三十四歳四
二歳五十二歳六十一歳七十九歳と加へる九
老湯代敷たり湯極れはるひ家とるれはるひ
治よりえよりあられをもひ年舞事とるひより
世とつるの年の事とせよとるひより
教とよびよして凡元年の事とせよとるひより
傳つてはるひ祥よふとつるひの事とせよと
舞とちり舞とせよとつるひの事とせよと
へしめり初といひしよまびりてたよ神佛の

或美入ひとり物ゆきせると一とやまて人
 乃其山羅縁をこれ天命をまひ何うそのまひ
 ともぬりまひやこれ危年とよるまひをばたき
 かまひ作すまひのまひん人まひまひまひ
 まろりまひまひ乃後身三の成れ日と臘日と号し
 ば日非とまひり又古此聖賢民は功の人とまひり
 よし澤高儀よんまひり又玉船を興ふ臘の先
 祀とまひり蟻を百非とまひり同のりて美まひり
 水多たまひり今日乃今世信よまひり中一掃すは
 乃よ食物まひりまひり製すまひりまひり性よまひり久し
 たりて換世の此時物守り物り又記す

○乾薑と製する法 母薑と室代中のあひ七日
 亦日浸し取あけ皮と去り干貯し
 ○山菜とくく貯し一を法は比のあひかりたり
 年久しる薯蕷とあひし細力く皮と去切ふ
 て米粉とあひしけ系よつぬと法執守鉄とふ
 ○糯米と粒米と凍米よる法 一日あひ漬し
 一日の乾すぬひとるり七次許久しく浸せぬ米氣
 ぬきとあひ糯米の案して懸餅に粒米の飯
 け粥として病人よ用れぬ病とまひり腸胃を福

てん腹よりづまひ

○救米と乾飯よまひる法 救米と多く臘水よ毎日
 後し蒸籠にこむし曝乾志く瓶よ入貯せし一用
 る時熱湯よ漬せし速く飲とけり粘るすし一用
 不塞甚なりあり粘り乃時布よ包てこれと沸湯に
 投すし八息よ飲とけり氣日周逆布し洗平石可飲併之
 ○糲米代粉と乾飯よまひる法 上白代糲米と煮り
 しく臘月の水よ浸し毎日多と少二三日色よく石
 臼とよく洗ひて右れ米と磨し多と少とてまひ
 りしくと一瀝と一毎い石臼少く磨して又とす

あふれ桶よ入あど加え一粘重く漬あど去りけり
 毎日水と攪く水乾とらり三日くらりし後棉布
 の紗袋よ右代粉と入してあど去極よとらりし
 水とと一すす出つ後よ多く乾飯入へりす多これの
 あとと一又袋かきとらりしととらりしととらりし
 去りて袋よりかきとらりしととらりしととらりし
 時又とらりしとらりして乾平よとらりしととらりしと
 小入しとらりして氣の濁るをうしとらりし一用乃時ゆり
 くとこゆと解し一熱湯よ投して後水よ浸して
 食り一糲米留汁にこみ再煮て食り一又赤豆の煮て

くつたすくつらく食の甚美あり性燥泄痢を
この脾胃と猶ふ事留けしと再煮て用へし但宿
食氣滞ありあり用へし

○赤小豆と多苑と多は 赤小豆と安中と煮く
とくくつた後入くして煮るに法子の一收垂し
年と経久して用ては換せし異月一應解の
包よ用てはと多苑の印附し用わすはと多苑と
○臘水と糖と紫く大子切て二三夕知くして後水
よつれ又二三日ひつて五割しよまはせし米粉と削
きく又臘あり八五一一煮る時ふかしく熱湯よ八

糞を此肉より通るか湯の中へ垂く五割し糖
煮と次煮久しく垂て煎出し熱湯に漬し米
豆粉と衣し用ひ粉をく片く煮く性抑し氣
と不塞恙久しく垂し四月中の二三夕よ一度水
を擲へし二月より毎日多くと切へしよまつさる
米粉と去されぬ候換し奥あり

○臘ありしと事留と知事し久しして換せし凡
事留大豆と煮るより大豆を石よ水去石粉斗入
粉食のた後より紅赤ありすく出せしと事留後ハ火
のこえん次骨よたさきて聖れやと能たぬて氣

此は...
 能に急熱してあり...
 白子...
 此は...
 豆汁...
 とな...
 て...
 二三...
 考...
 ○白米...
 大豆...

蒸...
 合...
 用...
 ○...
 米...
 一...
 魚...
 ○...
 瓶...
 豆...

并蓄油のうごと入白みく結つるをせよとけ温氣
乃強つらととさす一桶少くも瓶しても守めよと
とく至末年正月より新し又白く入つては
器に入まへ

○又法ぬくと多にわかくこQ大さあ丸堂の肉
に油をゆよれ一とあ桶と毛瓶にとも入至十
又日行とてかう一あは時日より一白く入
とまると塩とよく白くはる合せは桶と
ても瓶にとも器入とけまの塩にあらてよ
くまよ一とれはと久一とてはまの

臭か良法あり腹中の氣滞りま食滞り一と
病人に用へ

○厚皂と塩淹する法 厚皂等れ毛とぬきまて
腸と去洗りす毛核をぬくはく腹に塩とて入
又ゆりも薄所みく塩と多くこ入又外も塩と
よく付足とつらととらよ核合せさうまにけりて
一板とけの塩ゆきとらありも塩紙よつこま
苞よつこまけりさけま一と張るに塩淹れは
○塩淹の法 海綿と紙はよまう塩と多くけき
桶に入らぬの切らぬれと一両よとらあ

合せ一俵くまひりくして紙やうとくまを
又薦こもに包てまきりまきりけしは古たてくひて
こまの包ひひきくまきりかきけて一日にま
よよよ打込して塩に結約する時つらけけ
へ一或赤土の塩てまきり

○魚を携漬乃法 魚を二塩と替くまらひ上

一日一取至 麹は漬るまに三枚やと替は法至 其後取出

まのく塩とは法紙といくま氣とぬく糖と塩
かよふたぐひまんに塩と用ひまると乃塩かたれ
ぬの塩して塩とまきり魚と糖に漬くもの

とりのとまきりまきり一俵くまらひ上のまきり
男あひの縄をまきりまきりまきりまきり
まきり風引んまきり塩に扱扱せされぬまを扱せす
ま物を二俵用てまきりまきりまきりまきり
塩まきり加へまきりまきりまきり

○雜辨 骨は塩引まきり法 大に切り骨とまきり
浸さぬまきりまきりまきりまきりまきり
まきりまきりまきりまきりまきりまきり
まきりまきりまきりまきりまきりまきり
まきりまきりまきりまきりまきりまきり
○乾大根まきり法 骨まきり初日蒸すの皮と削り

根乃事よ各小繩乃海乃穴とわけ小繩よ愛く
 風ぬ事愛くよとてつ次日和御よりけまて大老の
 終る事て凡三平日をよきとて三善代日九て
 ぬれ何てぬおれ也ぶようけくまへてひく物
 あつ物あてつて風味甚佳

○胡椒シロガラシ乃つつけ物と製法へては明善堂の
 大たりとあつて能産二三日日と布一丈ありてそよ
 つる能産志とての味とそに改法てす一初より
 そそれつこれの味愛くて強く久くあつて
 半ゴザウ世芳も又そつてつてす

人乃生實よりり葉中の甲皮とせりて人何りてと
 根すれり口舌とたらう飲るやれ人乃甲皮と根片
 は切りて條月れあにせりてつつけをえりて換
 湯と煎及泡とれり毒者ありかたてつてでも推さ
 うせアセ根アセ又根の凡中皮と泡とるうは熱湯
 乃能てあて中皮をひきて後を分け又熱湯よ
 へてめけせされり毒とす

多中の香氷と解是へて愛くぬ穀乃糖菓臘月とを
 根を重よ入る平なり中の塩中へつてつてつて
 芳ひ風ぬれ不假やれすへ凡臘香氷の功用甚大

能一切の瘡瘻及瘰癧癰疽癩癬疥癬時疫と
 治し目疾といやくこれとくゆと他の瘡とゆれん味
 酢美にひて久し堪えとて鯨肉と浸せらるる月を換
 せ久し又穀百果乾蔬乃種子と浸せらるる多くして
 麩と生ぜり魚口のひこすり蒸して云々の瘡瘻諸病
 と治むと月令廣義よかんえんといふく臘雪水とすこ
 含麩とのののれ煮く共物擲強をた衣とすれは石炭
 臘月よ志めあるる香油と燒き盡す此の法諸病膏
 華に用て邪効有り婦人の病ぬれぬ瘡多く光有りて
 我生せり多き瘡を結集の用とて下り飲食兼禁めし

これと用く功他油の倍以又臘月の粘脂も亦
 貯て膏華多しを合すと一と月令廣義よかんえん
 元刀劍鉄戟等ととるる十月より正月までの間はを
 下りめればよくとく備生せの法よき中といふく製す
 柳の枝と切り置かれおる地を挿ハ結きして根と生すと
 六月忍冬葉と納まてこれと夏月蒸れ多く瘡
 へののめハ瘡疥と瘡す
 冬月甚多して瘡之の者ハ多しよく刃冷て凍死し
 或冬月多に凍死し凍死とらるる何の治肢すくは口瘡大
 微氣ありんせを多きり冷衣と脱去て常ハれ蒸て肢

たる衣とてつくこれとつこころ米と飯費一と袋
 に入んとて麩守へ一米ひゆき又他の袋は飯費一
 たる米とてつく麩守へ一或火とたまる竈の下に麩灰
 と用ひてもう一もうけして為濃よまの日用氣同く
 後を薑湯温酒粥をこして飲みて保赤守へ一生こころと
 と温ずして火とてつくわづら油の冷動と火乳とまき
 必要す又雄黄煇硝等分と用て末に赤眼症に速に
 撥散治すよとく十一月甲子の日と食りよの野々子の
 麩守の月令度義よとく猪肉猪肺肉生椒と食りよと
 已重くの燐より果菜と食りよかれ此と多食か決元

物に筋骨と食事かかれ米麦菽書にとく麩と食
 こころまくと害す牛肉と食りよなれ神とや
 する物と食りよなる生神氣と持す洋蝦乃麩と食
 事かかれ生を八股よとくは月のと草改と食へ
 一他月これと食へ病とあるす

損軒乃後よ雜書の中はと逐月の食物禁を説
 その多し毎小某月某物と食へ某病とまひ
 けふは法陽家の物志と夜とて一保よを御の志
 記す此をふ気とてうふ古れ方書にそまて言
 する亦他家本草にいまの裁りる所のなれ多く考

修すべし決しその志れども今け書りぬ雜書此既
世とそまう載て人の技圖の像をうけ可なり
乃心人此擇くこれとむ程とるよまのこ

十二月乃古候身一厚小郷身二懿如巢身三雅如維太
少多此三候あり身四雜如乳身五征多屬疾身六
氷澤腹壁太大多代三候あり 大二年十二月よりして
七年三候あり二年二候の
身ハ月令及臣氏書秋
雜書子多よまなり

十二月屋敷の刻數少多六と山奥及對大受ハ与大
異一反對之 月令度書

日本書時紀卷之七尾

附 都鄙祭事記

正月

元日 禁中御節會 ○二日 車馬本祭寺松囃子 ○三日
花多并及流鞠指 ○七日 禁中御節會 々々 笠面山祭
才天糸 茶摘川祓子 ○八月 十日と後七日御節法
○十日 西之文夷系 ○十三日 南都心經會 ○十四日 七
日と伊勢山四師子祓子 ○十五日 雲後爆竹 漢詠歌
如子能 河内國平云神粥 繩本國博及松囃子 ○十六日
禁中御節會 御節 御林寺大般若 漢詠詞 魔堂念仏
○十七日 伶人舞并露危丁 ○十八日 禁中爆竹 ○十九日

八幡夜祭 廿五日と法地忌 ○廿三日 本山寺
初詣 初宣 勸進

二月

朔日 七日と南無西多世同午宮と二月堂祈 ○四日
初年忌 ○七日 十日と南無新の徳 ○九日 十日と
少野新也達き寺経法 ○十日 本山麻生寺 ○十一日
涅槃会 涅槃大徳松 本山園孝堂 ○十六日 後法
○廿日 浅月会 ○廿一日 天竺寺 伶人森 ○廿五日 送の
寺会 少野天祥寺 吉祥院中 八徳あり 龍泉寺 月林会 ○
初卯 大乗会 ○初午 稲荷 止女堂 車橋寺 鐵

法馬 和泉園水乃与初午会 ○上申 春日会 ○後法

三月

二日 雙中關籠 飯倉初午 石山会 栗津会 土浦
初午 初石 ○又日 一乗寺会 竹寺会 ○六日 一乗寺
会 今日より十八日と 涅槃大念佛 ○八日 泉涌寺 本山
忌 ○九日 水尾会 泉涌寺 本山忌 絆の初 ○十日 今会
安楽花 ○十一日 吉祥會 式花見 ○十二日 今日より
日と天台経経緯 日在八子の 初敷あり 今日より十日と寺守大師
忌 本山永観堂 寺守あり ○十四日 壬午念佛 寺守と ○十五日 比良会
武州角田川大念佛 山崎火の初 ○十八日 深徳会

○十九日 暖帳初出 勇拔 ○廿日 本寺仁心弘法新修
 之雄 女坊 ○中の午 午の日二つを併し
初の午なり 掃帚の儀出 中平
 念佛 花開 之儀 柔摘 石清水臨時会

四月

朔日 比列院麻衣 ○二日 三日 南無多をの修 ○四日
 廣修会 龍田会 ○八日 灌佛 山門戒壇堂之修 ○
 九日 法多地之会 ○十日 南無の法事 ○十六日 三
 井寺之園之会 ○十七日 紀州和号之会 難修臨
 日之山 本照之会 尾列之古本修現之会 ○廿日 勢
 田屋之 ○廿一日 之修 勢田 ○上卯 掃帚之会 之修会

○上辰 八修会 ○上巳 山科会 比列多修会 同堅田会
 ○初申 大平会 平野会 ○初酉 松尾会 ○初亥 大津会
 ○中子 吉田会 ○中卯 比列八修会 ○中辰 向日修会
 ○中巳 久之会 ○中午 笑衣会 比列若の之会 ○中
 申 笑衣会 山王日吉会 山之上会 ○中酉 笑衣
 会 松尾会 梅之会 岡白殿聖多く沖之修 ○中
 亥 暖帳会

五月

朔日 笑衣修之儀 比列松中会 ○又日 笑衣修之
 儀 東之修 岡の修会 ○七日 今交修興出 ○八日

三治寺○十三日 懐州宮明神堂○十五日 今又寺○廿日
多治寺見○廿三日 坂本支社堂○廿八日 後者神田入
○晦日 祇堂神輿渡

七月

朔日 廿一と富士坊○二日 高嶺の虫拂 廿八日○又日
祇園會渡り初○七日 祇園會 今日より十四日と祇堂
御旗立○十四日 祇堂會 尾川津坊會 竹生坊會
後後朝天子堂○十五日 尾川津坊會 江戸の堂二年前
後者坊會 祇堂會 他他 寺寺 小倉祇堂會○十六日
今日より伊勢會多礼○十七日 お國寺熾法 志願寺

空 廣島會○十八日 祇堂神輿入○十九日 四多の系
納経七月○廿日 納経切○廿日 納経と礼の納経
○廿二日 大坂屋敷會○廿二日 松尾御前あそ 能三友
明り又友○廿四日 老定干日坊○廿五日 法寺の出平
王舌虫拂 大坂天後法 楊立會○晦日 聖殿久五月
能 後者神輿 江戸屋敷の日系○五月申 廿五日 江戸市

七月

朔日 聖殿後日能○六日 小野市の 法○七日 山守社
壇煤拂 車箱市の 并池坊の 祀 苑多并後朝 乙伏
参入○八日 又珠會○九日 古友坊○十日 法水子日坊

御旗立

三十一

○十二日 十五日と五日に於て燈籠 ○十四日 禁中燈籠 ○十
五日 八幡安岳の民 三升と云ふ物 其祭施徳鬼 今
より明日と云ふ處に石動子日事 十七日と云ふ浦に
帳 ○十六日より火事山火の事 松尾の火計の事 西の事
永乃火 松尾の事 自事より 九の事 松尾より 五
勢別留事 在津と入 ○十七日 素の事 喜日事 ○十八日 所
事 津出 ○廿日 地飛事 ○廿日 惟所 湯之浦

八月

朔日 禁中 左方より 所事 松尾 松尾 和泉國
村事 ○二日 堺天孫事 ○四日 少所天孫事 越前

敷契 亂は文事 ○八日 江別白旗 一戸帳 山行より山 ○十五日

津和八幡事 為文の儀事 松尾 畑枝事 八幡放生會 本

より文事 七坂江川より 大度 度次月見 比天 深川八幡

事 長門 光海事 坂前 岩崎事 ○十八日 津屋事 草名

事 ○廿二日 鹿澤 志子 佐 ○廿二日 廿二日と云ふ事 本

府 天孫事 ○廿四日 吉田事 ○彼岸 會

九月

一日 少所事 本帳事 ○八日 泉涌 志利 會 ○九日 彌事
志布 孫事 磯 磯事 比方 津安 文事 大坂 生事 流後
言良 大明 孫事 肥前 志孫 孫訪 孫事 ○十日 下 志孫 事

大津川伝文系 五條天神系 新田の文系 依尾山系
 ○十一日 伊勢守幣 岸 吉高之伊勢御被命 ○十二日
 右秦系 ○十三日 白川系 ○十五日 宗念系 桑田口系 江津田明
 津之三年之役能馬 河内系 寺前小倉系 ○十六日 東
 山系 徳系 正谷系 ○十七日 栲野池田系 服漢系 ○十八日 下系
 中系 多田系 竹田系 建仁寺門系 東系 整富系 飯田
 の系 ○十九日 大坂府麻系 院系 ○廿一日 右秦系 ○廿二日 岡田系
 本福系 浄寺系 麻谷系 別荘系 ○廿五日 天徳流満寺系
 田系 ○廿六日 山系 ○廿七日 栲野村系 ○廿八日 徳系 大坂橋
 五系 ○廿九日 月防系 ○三十日 中系 寺系 寺系 寺系

十月

又日 妙心寺 蓮花寺 十夜 ○六日 南無阿弥陀
 寺 法光寺 ○十日 修別金良系 十夜 ○十日 蓮花寺 蓮花寺 ○十
 二日 蓮花寺 蓮花寺 ○十三日 蓮花寺 蓮花寺 ○十五日 蓮花寺 蓮花寺
 蓮花寺 ○十六日 蓮花寺 蓮花寺 ○十七日 蓮花寺 蓮花寺 ○廿日 蓮
 花寺 蓮花寺 蓮花寺 ○廿一日 蓮花寺 蓮花寺 ○廿二日 蓮花寺 蓮花寺
 蓮花寺 蓮花寺 蓮花寺 ○廿三日 蓮花寺 蓮花寺 ○廿四日 蓮花寺 蓮花寺
 蓮花寺 蓮花寺 蓮花寺 ○廿五日 蓮花寺 蓮花寺 ○廿六日 蓮花寺 蓮花寺
 蓮花寺 蓮花寺 蓮花寺 ○廿七日 蓮花寺 蓮花寺 ○廿八日 蓮花寺 蓮花寺
 蓮花寺 蓮花寺 蓮花寺 ○廿九日 蓮花寺 蓮花寺 ○三十日 蓮花寺 蓮花寺

十一月

八日 蓮花寺 蓮花寺 ○十二日 蓮花寺 蓮花寺 ○廿二日 蓮花寺 蓮花寺
 蓮花寺 蓮花寺 蓮花寺 ○廿三日 蓮花寺 蓮花寺 ○廿四日 蓮花寺 蓮花寺
 蓮花寺 蓮花寺 蓮花寺 ○廿五日 蓮花寺 蓮花寺 ○廿六日 蓮花寺 蓮花寺
 蓮花寺 蓮花寺 蓮花寺 ○廿七日 蓮花寺 蓮花寺 ○廿八日 蓮花寺 蓮花寺
 蓮花寺 蓮花寺 蓮花寺 ○廿九日 蓮花寺 蓮花寺 ○三十日 蓮花寺 蓮花寺

十二月

十五日ハ城塞居臥○廿二日大座寺講堂○十九日廿二日
桂尾山佛名經○晦日 祇堂をめぐりけ 寺をめぐり友を布列
乃移り ○幕外 又條五律本 吉田雲

げ外圍りの大坐土座より多分へくれと云と云り
益親唐流れ此等多れい只中修し〜と云と云り
何々のの

北野系事記終

昔貞享五年戊辰三月上澣雒陽書肆日新堂壽梓

教訓人々讀書益有録

日本歳時記

全四冊

此乃日本の年中行事の類也。梅本一ノ本業種ノ採中ノ
抄此月命ヲ禁忌果實豐葉ノ中ノ寺社年中行事
御日若カキヤル人入用ノ事ヲ何ノ則原史ニ依
リテモテ之ヲ記述セリ

冥加訓

全五冊

冥道ノ神ハ仁義ノ徳ヲ發シ冥加アリ
福壽ヲ降シ子孫ニ及ボス事ヲ云フ

堪忍記

全四冊

よろしけれ事ニ成ラズカレんを忍れ
と云ハ生くるれい事ハ忍れ成事と云

雲水園雜纂

全五冊

身ヲ修ムル人ノ心ヲ修ムル事ヲ云フ
納言乃紙ノ記ナリ

貴族公序述

全二冊

家を治め身ヲ修む事ヲ訓ハシ皆心一ニ成ル
事ヲ云フ

諸礼教訓子儀産

全一冊

小笠原忠尚ノ方指教ニ依リテ乃禮訓
事ヲ云フ

日本在子

全五冊

人ノ公レ事ヲ云フ

一休杖揚校

全六冊

一休禪師一生ノ事ヲ云フ

繪本教訓文庫

全五冊

徳義縁方高徳小〜ノ事ヲ云フ

女教訓讀有徳書目録

娘教訓書百首

全一冊

むすめまかりんをうらやましく
むすめはこころもよすがてんはあかきうらやま
れきうくはあまよみ百人一首のうらやま
入るはせんといふことすまじきつげか
はあまのうらやまをいふことすまじき
はあまのうらやまをいふことすまじき

女教訓古今集

全二冊

女の子のしぐさの時より新に集むる
まかあまのしぐさのうらやまのうらやま
今川はなごころへて女をうらやま
つひあまのしぐさのうらやま

女今川教訓書

全二冊

今川はなごころへて女をうらやま
つひあまのしぐさのうらやま

女學則

全一冊

女乃教訓は一といふこと
志のあまのしぐさのうらやま

女歌道草

全一冊

百人一首古今和歌集
まかあまのしぐさのうらやま

女教書大全

全二冊

百人一首古今和歌集
まかあまのしぐさのうらやま

伊勢物語抄

全五冊

伊勢物語抄
まかあまのしぐさのうらやま

懐中女小全

全一冊

懐中女小全
まかあまのしぐさのうらやま

一 志用問合所座引

懐中女小全一冊 ○はなごころの
至てあまのしぐさのうらやま

一 大成正字通

徳教老改正 全小女一冊
新編正字通

一 早引正字通

○早引正字通
まかあまのしぐさのうらやま

一 當用出札大全

長玄海堂等 ○校書
まかあまのしぐさのうらやま

一 医療方規銘大成

茶のうらやまのしぐさ
まかあまのしぐさのうらやま

一 千字文玉字名

千字文玉字名
まかあまのしぐさのうらやま

安永十年辛丑三月

心麻橋南口了目
吉文字玉字名

大坂虫博

吉文字玉字名

